

年表にみる鹿鳴館時代

野 口 榮 子

1

さきに「日本の近代化とロココ趣味」⁽¹⁾と題する小論において、筆者は明治維新とともに日本に招来された西欧の文化の中で、十八世紀のフランスにおこったロココ趣味が西欧の各地を経て、鹿鳴館と迎賓館を中心にもたらされたことについて取扱った。そして日本の古来の文化のなかにもロココ趣味と同種の性格をもつものが存在することを指摘した。しかしながら鹿鳴館と迎賓館は必ずしも同一に論ずべき問題ではなく、その社会的背景や必要性においてもかなり異った面がみられる。明治十四年に着工され同十六年に完成し、同二十年には殆んどその使命を終了した鹿鳴館のもつ問題と、明治三十二年から十年がかりで完成し、以来わが国の国賓的宿泊所となった迎賓館を中心に考えなければならない問題は、単に点と線というような面を越えて、明治時代のもつ本質的課題に触れるものがある。

本研究は共同研究者である同志社大学教授金田民夫氏の「明治美学史年表」⁽²⁾に関連して、鹿鳴館時代を中心に明治初年以来的の美術に関する欧米との比較年表である。同時にわが国の欧風化の概略的なあとづけともなっている。なお美学関係美術関係の項目については、金田氏「明治美学史年表」との重複を避けるため、故意に省略したものもあることをおことわりしておく。

2

本年表と関連し、既稿「日本の近代化とロココ趣味」において取上げなかった問題として三つのことを指適したい。それは明治初年における日本の近代化に関連のある西欧諸国が、米国をも含めて多数の国であり、決して特定の単一国家がわが国と特別な関係を持っていたのではない

年表にみる鹿鳴館時代

ということ、および明治初年の日本の欧風化がほとんど明治五年くらいまでにその緒につき、しばらく低迷したのち明治十年代の後半―すなわち鹿鳴館時代にいたってほぼ定着していること、したがって鹿鳴館時代は早すぎた欧風化ではなくかなりの欧風化の基盤の上に成立っていること、また美術にかんしては洋画関係は明治後半になってからようやく順調に定着しはじめ、前半においてはまだ微弱であることなどである。そして明治二十年頃までの日本の欧風化は、それ以後の欧風化に比して極めて原初的爆発的であり、ややもすれば鹿鳴館時代が早すぎた欧風化と評価されるほどに、全体としては落ついた組織的な性格を有せず、それだけわれわれの興味をかきたてる面も多いといえることができる。

まず明治維新に先だってわが国に來朝した西欧諸国はアメリカ（一八五三年ペリー）より以前にオランダ（徳川幕府により一六四〇年以来長崎に居住貿易）、イギリス（一八〇八年長崎入港）、ロシア（一八三六年漂流民護送）、アメリカ（一八三七年入港砲撃）、フランス（一八四四年通商要求）など各国におよび、明治維新以後もわが国と諸外国の関係は、一国に限定されることなく継続された。東洋の一島国である日本にとってこのことは偶然ではなく、諸国が東方に視点を移し行動範囲をひろげる以上は、諸外国と種々の異なった関係が成立するのは当然のことである。しかしこのことはまた日本にとって欧米諸国を同時に並列的に理解し受け入れる結果となり、特定の一国と特殊な関係を持つという状況を免れることとなった。明治初年の日本人にとって諸外国は理念的に多数の海外における国家であり、常に比較しながらその存在を把握する対象であった。このことは日本の近代化とりわけ文化的側面の欧風化にとって等閑視せざるをえないことであり、平等に欧米諸国の文物を受け入れたところに日本の近代化のスピードの速さとかなり複雑な性格が成立したといえよう。明治初年の長崎版画や横浜浮世絵に欧米諸国の船舶や人物、言語を並列的に対比して描くテーマの多いことは、このような意識の表現として理解することができる。また明治初年およびそれ以後の欧風化の基準が、一国に偏せず多数の国から範をとる結果になったこともこのような事実と関連がある。もっともその当時すなわち十九世紀末の欧米の風俗文物は、どの国一つをとってもフランスのロココ趣味の影響を受けたかなり共通性のあるものであったことを考慮にいれないければならないと思うが。さらにこのことを鹿鳴館について問題にするなら、英国人バット・バーによって「その（筆者注鹿鳴館の）やや古風なスタイルはイギリス人の設計によるものであった。建物の中にはフランスの料理人が監督する大食堂、それに大広間、応接間、娛樂室、舞踏室、『散策のための回廊』もあった。バーではイギリスのタバコ、ドイツのビール、アメリカのカクテルが売られていた。その開館のさい、日本の

外務大臣は、鹿鳴館が国際交流の場を提供するために建設されたのだ、と声明した。『我が国最高の人士は外国人との大規模な社交の手本を示すことができる』と彼は説いた。大臣はさらにつけくわえて、以上の考えは、『あらゆる人々が親しく交ること』を例証するために、中国の古い宴の歌から借用した鹿鳴館という名のなかに示されている、⁽³⁾とも言った。⁽⁴⁾と述べられているように、その命名をもふくめて考えれば実に中国にまで及ぶ東西文化の結晶こそ鹿鳴館にはかならず、当時の日本人にはそのような混合が少しも奇異でなかったということは興味ふかいものがあるといえよう。

次に明治初年の日本の欧風化はおどろくべき速さで進捗し、年表によって知られるように、建築（明治元年）、電信業務（同二年）、遣外使節、郵便制度（同四年）、太陽暦、学制（同五年）など多くの事柄が明治五年頃までに完了している。同時に一般に肉食、靴の製造、アイスクリームの製造（いずれも明治二年）、服装・断髪令（同五年）など極めて初期に一般の生活に関連のある事項が登場していることも見除せない。しかしながら電信、郵便、暦などの事項を除いては、明治十年前後にそれらは一度低滞して、十二・三年頃から再び一般化され、やがて明治十年代後半に定着する道をたどっている。学制ですらその路線上にあり、鹿鳴館は明治十四年に着工されているので、まさにこの欧風化の一般的定着の最初の波に乗った出来事と考えられる。とはいえ鹿鳴館の建設とそれに伴う諸行事の派手さきらびやかさは、やはり一般の水準とかなりかけはなれたものであり、当時の人々によって異質不穏当の評価がなされたのも然るべきである。しかしながら従来はたんに一方的に鹿鳴館が当時の風潮から飛躍した荒唐無稽な思いつきのように取扱われることにたいしては、この年表にみられる前述の流れを考え合わせる必要があると思われる。そのためのひとつの裏付けとして本年表を提供するものである。

鹿鳴館時代の欧風化とは別にわが国の美術界の欧風化は比較のおそく、明治三十年代になってようやく規道に乗りはじめる。初期に英国に留学した国沢新九郎などが帰国してから後に早く世を去ったことや、この時代のフェノロサ、天心らの日本にたいする積極的な評価がややもすれば洋風画を後退させる結果となり、明治二十年頃まで——いわゆる鹿鳴館時代までには十分な成果があがっていないといえる。なかでも第一回内国絵画共進会（明治十五年）の規則第三条に「西洋画ヲ除クノ外流派ノ如何ヲ問ハス都テ出品スルヲ得ヘシ（略）」、第二回内国絵画共進会（明治十七年）の規制第四条に「洋法ノ画ヲ除クノ外流派ノ如何ヲ問ハズ総テ出品スルヲ許ス（略）」⁽⁵⁾など洋風画の受難時代が鹿鳴館時代と重なっていることは特筆すべきであろう。さらに当時のパリ画壇は十九世紀末のバルビゾン派やクールベらの時代を経て印象派が華やかに脚光

年表にみる鹿鳴館時代

を浴びる時期に当り、日本の洋風画との交流を考える上で数々の問題を提供している。さらに鹿鳴館時代と前後して翻訳文学について考える必要があるがこれは他日にゆずりたい。

このように考えるとわが国の明治初年の欧風化は鹿鳴館を一つの中心点として、明治二十年までに第一段階的な進展をとげていると考えられる。明治二十年後にもなお鹿鳴館で夜会や晩餐会がおこなわれていた事実は存在するが、条約改正を目標とした当初の鹿鳴館の意味は、明治二十年をもって一応の区切りをつけることができよう。明治二十一年には大隈重信が外相となり、明治二十二年には伊藤博文が起草した旧憲法が公布され、日本の近代化は次第に安定してくる。迎賓館の問題はその明治の後半に属し、日清・日露両戦争という画期的な事件が起ることを忘れてはならない。鹿鳴館の問題は実に明治期前半のひとつのわが国の象徴として新しく考察し直される必要があると思う。

注

- (1) 拙稿大手前女子大学論集第十号（昭和五十一年十一月十日）所載
- (2) 金田民夫編「明治美学史年表」同志社大学人文科学研究所周知第二巻第四号（一九七六・十二）
- (3) 鹿鳴館の建設事情および経過については(1)拙稿参照。
- (4) バット・バー著内藤豊訳「鹿鳴館―やって来た異人たち」早川書房昭和四十七年九月二十頁～二十一頁
- (5) 浦崎永錫著「日本近代美術発達史」〔明治篇〕東京美術刊昭和四十九年七月九二頁～一五二頁
- (6) 江藤淳著「明治の群像Ⅰ『海に火輪を』」新潮社昭和五十一年九月一頁
- 小木新造、前田愛編「明治大正図誌第一巻東京」筑摩書房昭和五十二年二月一頁～一三三頁

西 暦	元 号	日 本	欧 米
一八六七	慶 応 三	明治天皇践祚、大政奉還	パリ万国博覧会、マルクス『資本論』 アングル (D. Ingre) 死 (一七八〇～) ミレー (F. Millet) 『落穂拾い』
一八六八	明 治 元	神戸開港 清水喜助『築地ホテル館』 ドイツ人ワーグナー (G. Wagner) 来朝	ナポレオン三世「労働災害保険」の設立 スペインでプリムの革命（女王イサベラは一八七〇迄、フランスヘ亡命）

一八六九	明治二	五月 五稜郭の陥落（戊辰戦争の終） 六月 版籍奉還（同時に「華族」という名称を布告（一七年七月華族令） 東京へ横浜間電信業務開始（テレグラフ） （明治三、一阪神に電信架設、明治五、一東京へ関西、明治六、長崎まで） 北海道開発開拓使設置（明治一五廃止） 靴の製造（陸奥完光、大村益次郎のすすめ、明治一四、五、官吏・巡査・教員が使用） アイスクリーム 横浜町田房造売り出す。明治一一年風月堂試作、一三年東海国元町三橋堂、一九年風月堂新聞広告 「御養生牛肉」堀越藤吉が芝ではじめて開業 川上冬堂聴香読画館を開き洋画を教授する。 国沢新九郎渡欧。 靖国神社本殿	アイルランド国教会廃止 アメリカ大陸横断鉄道の開通 フランスで議会主義再建の上院決議 スエズ運河開通 カルポー（J. B. Carpeaux）＝踊り（パリオペラ座）
一八七〇	明治三	平民が名字を名のることを許される 大阪造幣寮の応接所（泉布観として現存するものイギリス人ウオーテレス（T. J. Waters） 物産局仮役所（博物館のはじまり） 仮名書魯文「西洋膝栗毛」を著す 一二月横浜毎日新聞創刊（日刊新聞のはじまり）	普仏戦争（ナポレオン三世の退位、パリ包囲戦） イタリア軍ヴァチカン占領
一八七一	明治四	廃藩置県（東京、大阪、鎮西、東北に四鎮台を置く） 岩倉具視を特命全權大使とする遣外使節団横浜を出航（副使は大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳） 近代郵便制度開始（東京へ大阪三昼夜余）	ヴェルサイユ宮殿でプロイセン王によるドイツ皇帝即位（ピスマルクがドイツ帝国宰相となる） パリコミュン起る。 ロダン（A. Rodin）イタリアへ

年表にみる鹿鳴館時代

年表にみる鹿鳴館時代

<p>西洋絵具の輸入、高橋由一油絵の展覧、川上生産「西画指南」近藤正純「泰西画式」</p>	<p>一八七二 明治五</p>
<p>岩倉具視らアメリカ大統領（二月二五日）、イギリス国王（一月五日）、フランス大統領（二月二八日）と会見。 新橋と横浜間鉄道開業、太陽暦使用 学制頒布（フランスの制度にならって全国に大・中・小の学区を設け、それぞれ大学校、中学校、小学校を置く。（しかし実行できず翌年まで一〇、〇〇〇を越す小学校。明治一三年初等科、中学校、高等科に分けられた。留学生規則もあり、イギリス・フランス・ドイツ・アメリカへ） 紀州藩主徳川茂永宮内省に献上（赤坂離宮） 官営模範工場（群馬県高岡の製糸場） （建築資材・内部の機械類すべてフランスより） 二月の大火により丸ノ内と銀座、築地の外人居留地あたりまで丸焼け（明治七年までに銀座の新しい街がつくられた一四、〇〇〇戸に達する）。 ガス燈（明治七と九年に増える） 大礼服・通常礼服制定（天皇も着用） 婦人礼服は明治一五年（皇后は一五・六年） 明治一八年女学校の制服、男子は一九年。 断髪令（明治七年頃までに殆んど実施） 石版印刷はじまる。</p>	<p>一八七三 明治六</p>
<p>クールベ（G. Courbet）コミューンに参加、美術委員長となり、コミューン敗北後、ヴァンドーム広場のナポレオン記念柱破壊の罪に問われ、投獄され、ウィーンからスイスへ亡命する。 シュリーマンのトロイ古代遺蹟発掘開始 最初の五月法と文化闘争のはじまり （聖職者の任免権と宗教の自由、ドイツ） 三帝会議（ドイツーウィルヘルムⅠ世、オーストリアーフランツ・ヨーゼフⅠ世、ロシア（アレクサンドルⅡ世）翌年三帝同盟</p>	<p>ウィーン万国博覧会に日本美術を出品</p>

一八七四	明治七	二五日)、ドイツ皇帝(三月一日)、ロシア皇帝(四月三日)デンマーク国王(四月一九日)、スエーデン、ノルウェー国王(四月二五日)、イタリア国王(五月一三日)、オーストリア皇帝(六月八日)、スイス大統領(六月二日)に会見、年内に前後して帰朝。 征韓論敗れる。 五姓田芳柳明治天皇像 新聞紙条目一八ヶ条公布	ロンドン経常博覧会 ドイツ軍のフランス占領終結 王政復古の失敗(フランス) ランボー地獄の季節 トルストイアンナ・カレニナ(一八七七)ローガン(P. Gauguin)の結婚
一八七五	明治八	岩倉具視、赤坂喰違で襲われて負傷。 国沢新九郎イギリスより帰朝し、翌年平河町に彰抜堂を開く。 フランス人、アベル・ゲリーノ来日(陸軍士官学校図画教師)安藤信光が両国に油絵縦覧所を開く。 イタリア人、キョソネ(E. Chiosone)来日(大蔵省紙幣寮)博覧会事務局が東京博物館となる。 国沢新九郎洋画展覧会を開く、同志社創立。	アルフォンゾ二世復位(スペイン) フランス共和国建設に関し、共和派とボナパルト派の論議 印象派第一回展覧会
一八七六	明治九	廐刀令公布。 札幌農学校にクラーク来日(前年開校) 東京医学校にベルツ来日 工部省所轄の工学校(翌年工部大学校と改称)附設の美術学校教師として、八月、フォンタネジ(A. Fontanesi)(絵画)十一月、ラグーザ(V. Ragusa)(彫塑)カッネッチ(G. V. Cappeletti)来朝(建築)(フォンタネジは一一年帰国) 高橋由一鯉	メルボルン万国博覧会 ミレー(一八一四)死、コロー(C. Corot)(一七九五)死 フランスで憲法可決(共和国) フィラデルフィア万国博覧会(新詰の技術が伝えられる) ベルの電話機発明 印象派第二回展覧会 ドガ(E. Degas)踊り子 アメリカ独立一〇〇年記念 七月四日ボストン美術館開館

年表にみる鹿鳴館時代

一八七七	明治一〇	<p>西南戦争</p> <p>第一回内国勸業博覧会（東京・上野）</p> <p>東京の開成、医学両学校が合併し東京大学となる。</p> <p>江戸川製陶所設立される。</p> <p>勸工会（後の東京彫工会）が起る。</p> <p>工部省は北品川に工作分局を設立し、イギリス人技師を招いて、プリント・ガラス、カット・ガラス等の製法を教授させている。</p> <p>イギリス人コンドル (J. Condre) 来日（工部省技術官並に工学寮教師として工部大学校に造家学科を担当し、日本人建築家の養成に尽力する。</p> <p>七月はじめて数度刷着色の色版印刷が行われる。</p> <p>塩川文麟（七〇才）死、国沢新九郎（三十一才）死</p>
一八七八	明治一一	<p>大久保利通刺殺される（四八才）</p> <p>郡区町村編制法等の制定</p> <p>陸軍参謀本部設置</p> <p>洋画研究所（十一字会）設立（小山正太郎、浅井忠、松岡寿フエノロサ (E. F. Fenollosa) 来日（東京大学哲学教師）</p> <p>塩田真ら毎月一回上野不忍池天竜山生池院において美術品評会を開く（竜池会）</p> <p>コーヒーの移植がおこなわれる（コーヒー店は明治二二年開店東京上野西黒門町可否茶館）</p>
一八七九	明治一二	<p>琉球を沖縄県とする</p> <p>学制を廃し、教育令制定</p> <p>アメリカ人モースによる大森貝塚の発見</p>
		<p>ロダンⅡ青銅時代（サロン）</p> <p>印象派第三国展覧会（印象の名はじめて使用）、ルノワールがムーラン・ド・ガレットを出品</p> <p>クールベー死、ジュネーヴ湖畔（一八一九）</p>
		<p>パリ万国博覧会</p> <p>ベルリン会議（ビスマルクⅡ失脚は一八九〇Ⅱのヴァルカン問題への仲介）露の不満のこる</p> <p>スーラ (G. Soulat) 色彩論への関心を高める</p>
		<p>シドニー万国博覧会</p> <p>ドイツ、オーストリア同盟</p> <p>スペインⅡアルタミラ洞窟壁画の発見</p>

一八八〇	明治一三	京都府画学校設立 工部美術学校にサン・ジョヴァンニ (A. Sangiovanni) が招かれる 五姓田義松、合田清はフランスへ 松岡寿はイタリヤへ留学 翻訳シルレル作、斎藤鉄太郎訳『「瑞正独立自由の弓弦」が出る 「君が代」の演奏	工部大学造家学科第一回卒業生辰野金吾(渡米する)らを出す 印刷局の古美術調査 訓育院(コンドルによる) 山形県済生館病院
一八八一	明治一四	明治一四年の政変(国会開設が明治二三年と決定する) 自由党結党(総理板垣退助) 第二回内国勸業博覧会開催、(博覧会美術品の陳列の過半が書であることから小山正太郎は岡倉覚三と論争する) 彫刻では牙彫が盛となる 西郷従道邸(現明治村)フランス風 川上冬崖(五四才)死	
一八八二	明治一五	立憲改進黨結党(総理大隈重信) 伊藤博文(四二才)憲法取調のため横浜を出航(他八名随員) 四月スエズ着、五月ベルリン着(ドイツ憲法学者ルドルフ・フ	第四回印象派展 ドーミエ (H. Daumier) 死(一八〇八) セザンヌ (P. Cézanne) のブラ訪問 メルボルン万国博覧会 ベルリン漁業博覧会 フランスで反ジェスイット教育法案通過 タヒチ島のフランス合併 フローベルの死(一八二一) ロダン『考える人 ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟 第五回印象派展覧会 フランクフルト鉱泉博覧会 アトランタ綿博覧会 アレクサンドルⅡ世の暗殺、アレクサンドルⅢ世の即位(ロシア) フランスはチュニスを保護国とする 条約を批准 第六回印象派展 マネ『政府よりレジョン・ド・ヌールを受ける セザンヌはピサロとポントワーズに住む オーストリー、トリエスト工業博覧会 条約改正に関する第一回各国連合争議会開催 イギリスのエジプト干渉

年表にみる鹿鳴館時代

<p>一八八四 明治一七</p>	<p>オン・グナリストと会見その高弟モツセの講義がはじまる（八月ウィーン着（ウィーン大学教授ローレンツ・フォン・シュタインに面会、九月にその講義がはじまる）十一月ベルリンへ、モツセの講義再開（十一月シュタインより日本への招聘を断られる。翌一六年八月横浜帰朝、二〇年首相伊藤博文憲法起草二年公布）</p> <p>日本銀行設立</p> <p>第一回内国絵画共進会（洋画排斥、フエノロサ竜池会で日本画を保護すべきであるとした）</p> <p>上野寛永寺本坊跡に博物館（博物館）の新築（コンドルによる）</p> <p>翻訳 ヴェルニエ作 川島恵之助訳『虚無党退治奇談』</p>
<p>一八八三 明治一六</p>	<p>岩倉具視（五九才）死</p> <p>コンドルの設計で鹿鳴館完成、一月盛大な開館式</p> <p>工部美術学校廃止されサンジョヴァンニ帰国</p> <p>維氏美学（ヴェロン、中江兆民訳）</p>
<p>一八八二 明治一五</p>	<p>独逸伊同盟（露仏の反対）</p> <p>第七回印象派展</p> <p>パリに第一回日本美術縦覧会が開かれた。</p>
<p>一八八一 明治一四</p>	<p>アムステルダム万国博覧会</p> <p>ボストン工芸万国博覧会</p> <p>ロンドン漁業博覧会</p> <p>クールベ（フランスの提督漢名孤拔）が安南にフランスの保護権を認めさせる</p> <p>スーラ（G. Seurat）点描画法により水浴を描く（翌年のサロンで拒絶される）</p> <p>ゴーガンが職を捨て絵画に専念する。</p> <p>マルクス（一八一八）死 マネ（一八三二）死</p> <p>モーパッサン『女の一生』</p>
<p>一八八〇 明治一三</p>	<p>ロンドン衛生博覧会</p> <p>レニングラード園芸博覧会</p> <p>エジンバラ森林博覧会</p>
<p>一八七九 明治一二</p>	<p>自由党员の蜂起、解党などがある</p> <p>ヤンソン教師指導のダンス講習会が始まる</p> <p>第二回内国絵画共進会（洋画除外）</p>

一八八五	明治一八	文部省図画教育調査会　フエノロサ、岡倉、小山委員にて古美術調査も行われる 原田直次郎渡独、黒田清輝渡仏 ユーゴー作　坂崎紫瀾訳『仏国革命修羅の衝』 六月　鹿鳴館で第一期舞踏会閉会式 一月　太政官制度廃止、内閣制度施行伊藤内閣 藤雅三渡仏	ニュー・オルレアンズ工業兼綿百年記念博覧会 ドイツ領西南アフリカ植民地の成立 マネの追憶展覧会 ルノワール (A. Renoir) 印象派をはなれる ロンドン万国博覧会 ドイツ、ニュルンベルク金工博覧会 ベルギーからのコンゴ独立 天清条約、スーラー『グランドジャット』 ゴッホ (V. Gogh) 『馬鈴薯を喰う人々』、アンリ・ルソー『絵画に専念しはじめる』
一八八六	明治一九	第一回条約改正会議 (外相井上馨) 一月三日鹿鳴会にて天皇節祝賀会 フエノロサ、岡倉古美術調査および欧米へ出張	ドイツ教皇と和解 (文化闘争終) 印象派第八回展最終 ゴッホとゴッガンはじめての出会い
一八八七	明治二〇	四月　伊藤首相主催鹿鳴館仮装舞踏会 七月　条約改正会議は無期延期を各国に通達した。 保安条例施行 東京府工芸共進会に洋画も出品 東京美術学校設立	三国同盟更新 パリに自由劇場の創設 ゴッガン『マルチニク島へ出発』
一八八八	明治二一	大隈重信外相に就任 狩野芳崖死 (六一才)	バルセロナ万国博覧会 フランス、イタリア関税紛争 ゴッホ、ゴッガンの共同生活 (アル)

年表にみる鹿鳴館時代

参考文献（注に既述のものを除く）

- 1 平凡社世界美術全集29年表・文献平凡社昭和32年8月
- 2 岩波講座日本歴史14近代(1)岩波書店一九六二、五
- 3 岩波講座日本歴史15近代(2)岩波書店一九六二、七
- 4 岩波講座日本歴史16近代(3)岩波書店一九六二、九
- 5 井上清著「明治維新」日本の歴史20中央公論社昭和41年9月
- 6 木村毅著「文明開化」日本歴史新書至文堂昭和四十一年十一月
- 7 原口清編「開国と攘夷」日本歴史シリーズ第一七卷世界文化社昭和41年11月
- 8 奈良本辰也編「幕藩制の動揺」日本歴史シリーズ第一六卷世界文化社昭和42年12月
- 9 ジャン・ドゥローム著橋口倫介訳年表世界史IV白水社一九六七年十二月
- 10 大久保利謙編「明治維新」日本歴史シリーズ第一八卷世界文化社昭和43年1月
- 11 源豊宗著「日本美術史年表」座右宝刊行会昭和四十七年二月
- 12 特集明治の女芸術生活七月号芸術生活社一九七五、七
- 13 隈元謙次郎著「お雇い外国人⑩美術」鹿島出版会昭和51年8月
- 14 児玉幸多他編「江戸時代図誌」別巻2絵年表筑摩書房昭和53年1月
- 15 土方定一・坂本勝比古編「明治大正図誌」第四卷横浜・神戸筑摩書房昭和53年4月
- 16 太陽コレクション7かわら版・新聞「江戸、明治三百事件」平凡社一九七八、八
- 17 Muther, R.: Geschichte der Malerei im XIX. Jahrhundert, 1893~1894.
- 18 Focillon, H.: La Peinture aux XIX-XXes, 1927~28.
- 19 Rewald, J.: Post-Impressionism from Van Gogh to Gauguin, 1956.
- 20 Zeidler, R.: Die Kunst des 19. Jahrhunderts (Propyläen Verlag) 1966.

（本研究は文部省科学研究費助成金による総合研究の分担課題である。）